

## 研究集会・講座等に関する事業一覧

プロジェクト名	担当部門	頁
第 29 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会（セ 35）	国際文化財保存修復協力センター	85
国際文化財保存修復研究会の実施（セ 11）	国際文化財保存修復協力センター	87
美術部オープンレクチャー（美 13）	美術部	88
芸能部公開学術講座（芸 06）	芸能部	89
芸能部夏期学術講座（芸 06）	芸能部	89
民俗芸能研究協議会（芸 13）	芸能部	90
第 35 回文化財保存修復研究協議会（修 16）	修復技術部	91
近代の文化遺産の保存修復に関する研究会（*修 01）	修復技術部	91
在外日本古美術品調査報告会（*修 05）	修復技術部	92
総合研究会（情）	協力調整官 情報調整室	93
美術部研究会（美）	美術部	93
保存科学部研究会（保）	保存科学部	94
各国の文化財保護制度に関する研究会（セ）	国際文化財保存修復協力センター	96

- \*注 ・近代の文化遺産の保存修復に関する研究会は、近代の文化遺産の保存修復に関する調査研究（修 01）の一環として実施した。
- ・在外日本古美術品調査報告会は、在外日本古美術品保存修復協力事業（修 05）の中で包括的に実施した。

**第 29 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会**  
**「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」コロキウム・シンポジウム**（セ 35-05-1/1）

「第 29 回文化財の保存・修復に関する国際研究集会」は国際文化財保存修復協力センターの担当で開催された。この研究集会は、東地中海沿岸から日本に至るまでのシルクロード沿いに残されている壁画の歴史・文化的な側面、あるいは技法や材料といったさまざまな側面に焦点をあて、当時の東西文化交流の実相に迫ろうという試みであった。今回は、専門家の議論の場として「コロキウム」を、そして一般の方々への情報公開の場として「シンポジウム」をあわせて開催した。壁画に限らず、文化遺産の保存修復は、材質や周辺環境の違い、保存に対する意識の違いといった様々な要素を考慮することが求められ、保存修復の方針も一概に同じとは言えない。そこで、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことが重要となる。今回は、壁画に携わる様々な分野の専門家による具体的な報告を通して、美術史的な研究の現状、保存、それにまつわる問題点など、多岐にわたる情報交換の場を提供した。

**シルクロードの壁画が語る東西文化交流 コロキウム**

日 時：2006（平成 18）年 1 月 24 日（火）～26 日（木）

会 場：オリンピック記念総合青少年センター国際会議場

参加者数：197 人

3 日間にわたるコロキウムでは、日本、イギリス、イタリア、アメリカ、インド、韓国、中国、ロシア、フランス、カンボジア、タイの壁画の保存修復に関わる専門家および美術史家、歴史家計 31 名が一堂に会し、シルクロード沿いに位置する壁画をテーマにさまざまな視点から討議を行った。

西洋と東洋という単純化した影響論に終始せず、シルクロードにおける壁画の美術史的・歴史的側面の知識を、世界の専門家たちと共有するとともに、各地域の複雑な文化の融合によって生み出された壁画技法や材料、描かれたモチーフの意味などについて具体的に議論しあうことで、地中海地方から日本にかけてのダイナミックな東西の文化交流の一端を明らかにすることができた。それと同時に、文化遺産としての壁画の保存と修復が抱えている問題点も浮き彫りになった。破壊や盗難、現地の状況に応じた保存修復技術、人材育成と技術移転、文化遺産を守るための社会の意識など、数多くの問題点が指摘された。シルクロード周辺地域で行われてきた各国による修復事業や人材育成が、そうした文化財を有する国々にとって本当に有益かつ適切な形で行われてきたのかどうか、という点も考えるべき点であろう。その意味で、今回、西欧諸国とシルクロード沿いのアジア諸国の専門家が同じ席につき、西欧のみならず、アジアからの視点や方法論についても話し合うことができたことは、一つの非常に大きな成果であった。

最終日の総合討議においては、シルクロードの壁画の保存については、様々な分野の専門家の協力が必要であり、過去において東西の人々が交流し、文化が発展してきた歴史を示す壁画を未来の人々に伝えていくためには、現代に生きる私たちが、東西の経験を共有し協力していかなければならない、ということが確認された。

**<第 1 日> 壁画美術とその交流史**

西アジアとコーカサスの壁画 デイヴィッド・パーク（コートールド美術学院）

中央アジアの王族の世界観：アフラシアブの壁画から フランツ・グルネ（フランス国立高等研究院）

インドからみたシルクロードの壁画 宮治昭（名古屋大学）

中国の仏教壁画 岡田健（東京文化財研究所）

中国の古墳壁画 百橋明穂（神戸大学）

高句麗古墳壁画にみられる中国と中央アジアの関連について キム・リナ（弘益大学）

中央アジア壁画の放射性炭素 14 年代と美術史編年の比較 岩井俊平（東京文化財研究所）

日本の壁画美術 渡邊明義（東京文化財研究所名誉研究員）

討議：文化交流の諸相（伝播・受容・変容・創造）

**<第 2 日> 壁画製作技法の波及：材料と絵画技法**

仏教伝来前後の日本で用いられた顔料の特徴について 朽津信明（東京文化財研究所）

ギリシア・ローマ時代における異文化間交流と絵画材料の交易 イオアナ・カクウリ(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

中央アジア壁画における膠着材及び顔料に関する科学的分析 アレクサンダー・コソラポフ/カミラ・カリニーナ(エルミタージュ美術館)

流出文化財：バーミヤーンの仏教壁画に関する材料と絵画技法の非接触調査 関博充(東京文化財研究所)  
初井基充(東京芸術大学)

インドにおける石窟壁画の彩色技法および材料とその保存について R.K.シャルマ(インド考古調査局)

中国西部地域における壁画の保存と製作技法および保存方法に関する研究 馬涛(西安文化遺産修復センター)

敦煌莫高窟における壁画材料と技法 王旭東(敦煌研究院保護研究所)

討議：シルクロード地域の壁画材料と絵画技法

### <第3日> シルクロード周辺地域における壁画保存の現状と課題

高松塚古墳壁画の保存と現状 三浦定俊(東京文化財研究所)

中央アジア将来壁画の保存処理 キム・ヨンミ(韓国国立扶餘博物館)

バーミヤーン仏教壁画の保存修復とその課題 谷口陽子(東京文化財研究所)

遺跡から出土した壁画の保存と修復 アデリア・ブリアヘル/ヴェラ・フォミニーフ(エルミタージュ美術館)

中国西域および敦煌莫高窟における壁画保存について 王旭東(敦煌研究院保護研究所)

高句麗古墳壁画の科学的調査と保存について ロッコ・マツエオ(ボローニャ大学)

ロドルフォ・ルーハン(壁画保存修復専門家)

壁画保存の歴史、現状と課題 シャロン・カーター(コートールド美術学院)

討議：壁画保存研究の課題と展望

### シルクロードの壁画が語る東西文化交流 シンポジウム

美術史・文化史、壁画の技法と材料、壁画の保存修復の視点から6名の専門家が講演を行い、パネルディスカッションでは保存におけるこれからの課題について話し合われた。

日時：2006(平成18)年1月28日(土)10:50~18:00

会場：東京国立博物館平成館講堂

参加者数：269人

シルクロードの壁画 前田耕作(東京文化財研究所客員研究員)

中央アジアの王族の世界観：アフラシアブの壁画から フランツ・グルネ(フランス国立高等研究院)

ギリシア・ローマ時代における異文化間交流と絵画材料の交易 イオアナ・カクウリ(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

中国西域および敦煌莫高窟における壁画保存について 王旭東(敦煌研究院保護研究所)

日本における壁画保存の歴史と現状 三浦定俊(東京文化財研究所)

壁画保存の歴史、現状と課題 シャロン・カーター(コートールド美術学院)

総合討議：シルクロードの壁画：そしてその保存とこれからの課題



コロキウム



シンポジウム：パネルディスカッション

## 国際文化財保存修復研究会（セ 11-05-5/5）

文化財は、個々の地域の文化と伝統を反映し、地域の人々の思いに支えられて現代に伝えられたものであり、その内容、材質、おかれている物理的な環境の違いとともに、文化財自体に対する人びとの接し方、保存の考え方にも違いがある。国際協力による文化財保存とは、パートナーとなる国や地域の状況を理解し、同時に私たち自身の文化財保存についての考え方や方法を理解してもらいながら、互いの協力によって推進されるべきものである。日本の専門家による海外の文化財保存事業への参加がますます増えている現在、東京文化財研究所は、みずから国際的な文化財保存活動に参加するとともに、専門家相互のネットワークを作り、情報交換の場を提供していくことを大きな使命と考えている。このような目的から、年2回、国際文化財保存修復研究会を開催し、専門家による報告を通して、具体的な海外での保存事業における技術的な問題から運営面、財政面の問題、さらには文化財をとりまく社会の問題、文化そのものの問題など、多岐にわたる情報交換の場を提供している。

## 第18回国際文化財保存修復研究会

テーマ：文化的景観の成立、その変遷

趣旨：そもそも“文化的景観”とは何か、という根本的な問題について、考古学、地理学、歴史学、民俗学など、各分野で行われている“文化的景観”についての認識の方法と実践例を通して、“文化的景観”の本質とその保存との関係を考え、理解を深めようという趣旨で研究会を開催した。

日時：2005（平成17）年9月28日（水） 10:30～17:00

会場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：81人

講演内容：「イラン・キャルラズ渓谷の文化的景観の出現と変遷」（東京文化財研究所・山内和也）

「江戸 東京における都市景観の変遷」（同志社大学・津村宏臣）

「棚田景観の歴史性と文化性の相違」（国立歴史民俗博物館・篠原徹）

## 第19回国際文化財保存修復研究会

テーマ：文化遺産の公開・活用と保存環境

趣旨：発掘された遺跡や、修復された建造物など、大型の不動産文化財が、その後に公開・活用される場合、人が立ち入り、中の様子を観察・鑑賞することにもなう様々な環境の変化が発生する。文化遺産の公開・活用とそれにもなう保存環境の問題、そして問題解決の実践例について、内外の専門家の報告を聞くことを目的として、研究会を実施した。

日時：2005（平成17）年12月21日（水） 10:00～16:30

会場：東京文化財研究所セミナー室

出席者数：52人

講演内容：「フゴッペ洞窟の公開に伴う光制御」（余市町教育委員会・浅野敏昭、東京文化財研究所・朽津信明）

「大規模な内部空間の公開と保存：ハギア・ソフィア大聖堂の内部微気候」（筑波大学・日高健一郎）

「古墳整備における遺構の公開 西都原古墳群の事例を中心として」（文化財保存計画協会・甲斐章子）

「パラオにおける日本統治時代の建築物の活用と保存」（熊本県立大学・辻原万規彦）

### 第 39 回美術部オープンレクチャー 「日本における外来美術の受容」( 美 13-05-5/5 )

美術部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座「美術部オープンレクチャー」を毎年秋に開催しており、本年度で 39 回目を迎えた。昨年度同様、今年度も金曜日と土曜日の午後、2 日連続で開講し、聴講者の便宜を図るよう努めた。前回に引きつづき、美術部の研究プロジェクト「東アジア地域における美術交流の研究 日本における外来美術の受容に関する調査・研究」をテーマに掲げた。個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開かれる「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても企画されている。

今回は、2 日間で、のべ 241 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、164 人から回答を得た（回収率 68%）。結果は、「たいへん満足した」86 人（52.4%）、「おおむね満足した」76 人（46.3%）、「不満が残った」1 人（0.6%）無回答 1 人（0.6%）を数え、回答者の 98.7% が満足感を得たことがわかった。

第 1 日：2005（平成 17）年 11 月 4 日（金）午後 1：30 分～4：00 東京文化財研究所セミナー室

津田徹英（美術部主任研究官）「中世における中国道教神の受容をめぐって」

北天に輝く北極星を尊格化したのが妙見菩薩である。その信仰は奈良時代に遡り、以来、平安末期までに様々な像容が出現するに至っている。しかしながら鎌倉時代以降に信仰されたそれは、それまでの妙見菩薩の像容とは全く異なっており、道服もしくは甲冑を纏い、髪を総髪とするが、同時代の密教図像集には全く言及をみない。ただし、その姿を手がかりに広く中国にまで類似の像容を求めてみると、道教の真武神が極めて近く、どうやら道教の真武神にもとづいて新たな像容の妙見菩薩が日本において出現をみたようである。本講演は、道教の真武神がいつごろ誰の主導のもと妙見菩薩として受容され定着に至ったかを探るもので、その過程において生じた様々な問題を浮かびあがらせてみた。

朴亨國（武蔵野美術大学助教授）「韓国と日本の女神像の初期図像」

韓国慶尚北道慶州市に位置する南山は、新羅最大の仏教霊山であり、40 余の谷に約 100 以上の寺院跡があり、文化財級の石仏が 60 軀以上、石塔が 40 基以上散在している。その中で、最も古い仏像として知られているのが、仏谷にある龕室坐像である。韓国彫刻史関係の書物にもよく登場するが、いずれも「特殊な形を有する」、「慈悲深い」、「両手を隠して禅定に入っている」、あるいは「女性らしい」という表現を用いながら、「仏坐像」としている。本発表は、仏谷像が現在言われているような仏坐像ではなく、実は女神像であること、また仏谷像と同一図像を有する女神像が京都・松尾大社の市杵島姫命の像とされる木造女神坐像であること、さらに仏谷像のような新羅の女神像が日本の女神像成立に関連している可能性が高いことを語った。

第 2 日：2005（平成 17）年 11 月 5 日（土）午後 1：30 分～4：00 東京文化財研究所セミナー室

塩谷 純（美術部主任研究官）「川端玉章について 円山派の近代」

川端玉章（1842～1913）は京都の円山応挙の流れを汲みながら、明治期の東京を活躍の場とした日本画家である。東京美術学校教授として、橋本雅邦と並び当時の日本画壇を代表する人物であったが、これまでまとまった研究はなされてこなかった。雅邦対玉章という構図が日本美術院および无声会へと引き継がれることを考えるならば、その存在は看過し得ず、また明治初期には洋画家の高橋由一に師事するという、日本画と洋画のはざまを往来したその軌跡についても興味はつきない。応挙以来の“写生派”を任じながら、川端玉章という画家が近代という時代とどのように渡りあったのか、考えてみた。

児島薫（実践女子大学助教授）「藤島武二の〈東洋〉」

藤島武二（1896-1943）は、1896 年に東京美術学校に西洋画科が設置されたときに助教授に迎えられ、1905 年から 10 年にかけてフランス、イタリアに留学した。帰国後は教授に任じられ、文部官僚としての生涯を送った。当時の国家体制のなかで彼の人生をとらえるならば、その後半生は、高等官としての公的な立場を抜きに考えることはできない。留学後、日本を代表する画家の一人となった藤島は、日本が植民地を拡大する時代のなかで、自身の西欧経験をもとにしてアジアをどうとらえるか、という問題にとりくんだ。藤島が日本のモダニティとアジアを対比させ「東洋精神」という主題を見いだすことになった過程を追った。

## 第36回芸能部公開学術講座「中世の寺院と芸能」(芸06-05-5/5)

日 時：2005(平成17)年12月1日(木)

場 所：江戸東京博物館ホール

入場者数：455名

今年度は、寺院で行われた中世芸能について、能との関わり、および雅楽、声明の観点から考察を行った。講演では、能の乱拍子と寺院芸能の乱拍子の関係を指摘し、講演では中世天台宗の寺院で唱えられていた声明曲と雅楽の歌物について、旋律の点で交流があったこと、今日とは異なって声明に雅楽の伴奏(付物)が行われていたことを論じた。講演の内容にあわせて、雅楽演奏団体「伶楽舎」と天台声明演奏団体「七声会」により、伽陀「敬礼天人」と朗詠「東岸」の復元演奏が行われた。単なる復元を越えた芸術的に完成度の高い演奏で、来場者から高い評価を得た。

## プログラム

講演	「寺院芸能と能」	高桑いづみ(芸能部音楽舞踊研究室長)
講演	「中世天台声明とその周辺 声明・雅楽の古楽譜による旋律の復元」	近藤 静乃(芸能部調査員)
実演	朗詠「東岸」	天台声明：海老原廣伸ほか(七声会)
	声明「伽陀」	雅楽：角田真美・中村かほる・三浦礼美(伶楽舎)

## 芸能部夏期学術講座(芸06-05-5/5)

## 第30回夏期学術講座「音の聞こえる芸能史研究」

日 時：2005(平成17)年7月26日(火)~28日(木)

(1) 10:30~12:30、(2) 13:15~14:45、(3) 15:00~16:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：52名

担当講師：高桑いづみ(芸能部音楽舞踊研究室長) 野川美穂子(芸能部調査員)

テ ー マ：「音の聞こえる芸能史研究」

趣 旨：これまで舞台芸能の研究は文献主体で進められてきたが、それでは生きた芸能の姿は浮かび上がってこない。従来より行っていた音楽や演出の技法研究を加味し、音声や画像などの資料を駆使しながら、過去の芸能の舞台姿や音を浮かび上がらせようと試みた。

## プログラム

第1日	13:15~14:45	変化と継承 能のテキストと演出
	15:00~16:30	能の演出を遡る 桃山時代の能復元
第2日	10:30~12:30	楽器からとらえる芸能史1 鼓胴
	13:15~14:45	楽器からとらえる芸能史2 横笛
	15:00~16:30	楽器からとらえる芸能史3 和琴
第3日	10:30~12:30	ジャンルを超えた芸能交流1 乱声
	13:15~14:45	ジャンルを超えた芸能交流2 近世初頭の歌謡
	15:00~16:30	質疑

## 民俗芸能研究協議会 ( 芸 13-05-5/5 )

### 第 8 回民俗芸能研究協議会「無形民俗文化財の映像記録作成」

日 時：2005 (平成 17) 年 11 月 24 日 (木) 10:30 ~ 17:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：95 名

テ ー マ：無形民俗文化財の映像記録作成

趣 旨：芸能部では毎年テーマを定め、保存会関係者・行政担当者・研究者などが一堂に会して民俗芸能の保護と継承について研究協議する会を開催しており、本年度は第 8 回である。すでに芸能部では、平成 14 年度の第 5 回民俗芸能研究協議会を「民俗芸能の映像記録作成」をテーマとして開催しているが、そこで浮かび上がった課題について、平成 15 年度より「民俗芸能の映像記録作成」小協議会を継続的に開催して検討してきた。今回の協議会では、上記小協議会において検討された内容の中間報告会として、小協議会参加メンバー 5 名より、検討の成果をまとめて報告を行った。この報告をもとに、コメンテーターやフロア参加者も含めた全体的な協議を行い、多くの文化財行政担当者や研究者、伝承者の方々の意見を求めた。また、韓国国立文化財研究所芸能民俗研究室よりゲストコメンテーターを招き、同国の無形文化財の映像記録作成の実態と課題を聞き、わが国の場合との比較検討を行った。協議の成果は報告書として刊行した。

#### プログラム：

10:30 ~ 10:40	挨拶	所長・鈴木 規夫
10:40 ~ 10:50	趣旨説明	芸能部・俵木 悟
10:50 ~ 11:20	「民俗文化財映像記録のねらいと枠組み」	客員研究員・大島 暁雄
11:20 ~ 11:50	「映像記録作成の準備と事前調査」	株式会社ポルケ・大日野佳代子
11:50 ~ 13:30	( 昼食 )	
13:30 ~ 14:00	「映像記録の制作実務に関する諸問題 取材・制作スタッフと機材」	東北文化財映像研究所・阿部 武司
14:00 ~ 14:30	「撮影・編集に際して心がけること」	株式会社ポルケ・中藪 規正
14:30 ~ 15:00	「映像記録のこれからの課題 有効な保存と活用に向けて」	芸能部・俵木 悟
15:00 ~ 15:20	( 休憩 )	
15:20 ~ 17:20	総合討議	
	コメンテーター	滋賀県教育委員会文化財保護課・長谷川嘉和 民俗芸能学会代表理事・山路 興造
	ゲストコメンテーター	韓国国立文化財研究所・朴 相國 韓国国立文化財研究所・朴 原模
	コーディネーター	芸能部・宮田 繁幸
	総合司会	芸能部・俵木 悟

なお、平成 15 年度より継続開催している「民俗芸能の映像記録作成」小協議会について、平成 17 年度は 3 回の協議を行った。その成果は第 8 回民俗芸能研究協議会で報告された。

第 6 回：2005 (平成 17) 年 4 月 22 日 (金) 参加者 18 名

第 7 回：2005 (平成 17) 年 6 月 24 日 (金) 参加者 14 名

第 8 回：2005 (平成 17) 年 9 月 9 日 (金) 参加者 11 名

## 第 35 回文化財保存修復研究協議会 ( 修 16-05-1/1 )

## 目 的

研究協議会では修復技術や材料、保存及び調査手法など、文化財の保存と修復に関わるテーマを設定し、公開発表及び討論の場を提供してきた。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交代で担当してきたが、平成 17 年度は修復技術部が担当した。

近年、科学的見地から伝統的修復材料を見直すことで、伝統的技法のあらたな側面の発見や、修復材料の改良・開発など、様々な報告がなされている。本年度は特に日本画の伝統的な修復材料である紙や絹などの基底材および糊などの接着剤について、各専門家による最近の研究開発成果の報告を行った。

## 概 要

テ ー マ：伝統的日本画修復材料への科学的アプローチ ～近年の動向～

日 時：2005 (平成 17) 年 7 月 29 日 (金) 13:30 ~ 17:00

会 場：東京文化財研究所セミナー室

参加者：65 名

講 演 者：秦 珠子 (農業生物資源研究所)「紫外線劣化絹の問題点とその改良」

長谷川 聡 (長谷川和紙工房)「手漉き和紙製造現場での不手際や化学薬品使用の実体について」

加藤 雅人 (東京文化財研究所)「紙への添加材料について」

久保田倫夫 (林原生物化学研究所)「古糊様多糖の調製」

早川 典子 (東京文化財研究所)「文化財修復に用いられる接着剤の物性とその使用条件」

## 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会 ( 修 01-05-5/5 の一部として実施 )

平成 17 年度は、一地域に所在する多様な近代化遺産の保存活用方法を主なテーマとして研究を行った。ドイツとスイスから、博物館の保存担当官、近代化遺産の保存計画立案者や修復技術者などを招いて、呉市・江田島市において、現地の研究者の参加も得てフィールドワークを行い、各研究者の視点から当該地区の近代化遺産の保存活用に関する検討会を行った。

## 第 17 回 「呉市における近代化遺産の保存修復と活用」

日 時：2005 (平成 17) 年 7 月 19 日 (水) 9:30 ~ 15:00

会 場：呉市海事歴史科学館

講 演 者：川野邊 渉 (東京文化財研究所)「呉の近代化遺産」

松下 宏 (呉市文化財保護委員・呉市入船山記念館審議会委員)「呉市の近代建築の保存について」  
アルフレッド・ゴットヴァルト (ドイツ技術博物館)

「ドイツ技術博物館におけるオブジェクトの展示・調査・保存」

ノルベルト・テンペル (ドイツ・ヴェストファーレン産業博物館)

「発展するヨーロッパの水景観の遺産」

ハンス・ピーター・ベルチ (スイス・ARIAS 産業文化)「スイスの船舶関連遺産」

石丸 紀興 (広島国際大学社会環境科学部)

「呉市の近代化遺産 広島における近代化建築遺産との比較において考える」

ロルフ・ホーマン (ドイツ・産業考古学事務所)「港湾関連の近代化遺産について」

## 第 18 回 「近代化遺産の修復のための諸問題」

日 時：2005 (平成 17) 年 12 月 16 日 (金) 13:00 ~ 16:30



会 場：東京文化財研究所会議室

講 演 者：川野邊 渉（東京文化財研究所）「近代化遺産の修復における問題点について」

松本 純子（文化庁文化財部美術学芸課）「文化財としての近代化遺産の保存修理」

長島 宏行（日本航空協会）「文化財としての航空機修復」

岸 由一郎（交通博物館）「鉄道文化財の保存修復に関する問題点」

中山 俊介（MES 特機株式会社）「日本における鋼船の保存に関する問題点」

## 在外日本古美術品保存修復技術研究会（ 修 05-05-5/5 の一部として実施）

東京文化財研究所では、在外日本古美術品保存修復協力事業を行っている。これは、海外で保管されている絵画や工芸品など日本美術品を対象に保存修復を行う協力事業である。対象となる美術作品は、海外の乾燥した気象条件のもとで保存されていたために、日本国内のものと比較して劣化・破損が目立つものが多い。そのために、従来の保存修復技術では十分な修復ができないケースもあり、修復に際して様々な実験や物性の調査を行う必要がある。

平成 17 年度は、下記の通り研究会を開催し、「黒韋腰取威筋兜」（メトロポリタン美術館蔵）と「山水人物蒔絵筆筒」（スペイン国立装飾美術館蔵）に関する意見交換及び製作技法の検討を行った。

日 時：2005（平成 17）年 11 月 9 日（水） 15:00～17:00

会 場：東京文化財研究所修復技術部第 1 アトリエ

概 要：

「黒韋腰取威筋兜」は、14 世紀の武具で、同時期の大鎧とともに米国メトロポリタン美術館が保管する。この兜は、鉄製黒漆塗りの鉢の上に鍍金を施した金銅製飾筋を取付ける極めて優れた技術で制作されている。また、シコロは、革と鉄小札を黒革・絹の白糸緘で交互に繋げた当初の状態が残されていた。しかし、長年の展示保存で鉢の黒漆が多くの部分で剥落し鉄地に赤錆が浮き上がり、さらにシコロの小札頭に黒漆の剥落箇所が多くあり、素地の鉄が錆びた状態であった。そのためにクリーニングに多くの時間を費やし、生漆で漆固めをして防錆処理を行った。これは、表面に漆を塗ってから地粉を蒔き付ける蒔地で作られており、江戸時代の塗装法とはことなる中世の技法であることがひとつの原因になっていた。また、シコロの白糸緘は、経年劣化により絹が繊維状に粉砕しはじめており、大変危険な状態で修復をせざるを得ない状況であった。

「山水人物蒔絵筆筒」は、家具として実際に使用された輸出漆器である。ヨーロッパで数回の修理を受けていた。修理のたびに塗ったシェラックが劣化を起こし、何層もの茶色い層が表面を覆っていた。また、天井・扉面及び側面に施されていた高蒔絵は、使用のためにすり減って内部からキャメルカラーの下地が露出している。さらに、扉内部の抽斗正面に描かれた赤い千翁の花が摩滅のためにすり減り、その上からヨーロッパ塗料によって補彩されていた。作品の扉及び右側面に螺鈿で表した菊花の文様が、貝の裏側に伏彩色があり、19 世紀に盛んに作られるようになる長崎螺鈿とほぼ同様の技法がみられることから長崎螺鈿の先駆けとなる作品ではないかと考えている。

研究会当日は、現在修復を担当している修復家の説明を受け、質疑応答を繰り返しながら検討した。質疑応答から得られた修復方法に関する改善策は以下の通りであった。

「黒韋腰取威筋兜」

・鉢の赤錆の除去後の防錆処理についてはどのような方法で行うか？

（漆は優れた防錆剤であるので、錆の除去後に希釈した生漆を数回に分けて塗布する。）

・シコロの小札頭の処理はどのようにするのか？

（小札は、黒革と白い絹糸で緘されているので、錆を除去するときと漆を塗るときに革・絹にふれずに修復するのが難しい。相当細かい養生が必要と考えている。）

「山水人物蒔絵筆筒」

・劣化したシェラックの除去はどのように行うのか？

（以前、ギメ東洋美術館の洋櫃を修復したがその時も同様な劣化塗膜を除去した経験がある。はじめに溶剤テスト

を行い、適材を選定して綿棒又は木綿布を使いながら表面をクリーニングする予定である。)

・欠失した角金具はどこまで復元をするのか？

(角金具は製作当初の日本製であるため、補った金具がすぐに判るよう形状のみ復元して文様は彫り込まない。)

## 総合研究会 ( 情 )

所内で開催する総合研究会は、協力調整官 情報調整室が担当する。各研究部・センターの研究員がテーマを設定してプロジェクトの成果を研究発表し、テーマに関して所内の研究者間で自由討論するシンポジウム形式をとっている。平成17年度は、以下のスケジュールで実施した(会場：東京文化財研究所セミナー室)

第1回 2005(平成17)年10月4日(火)

発表者：石崎 武志(保存科学部)

「高松塚古墳・墳丘部の土質・地盤調査と冷却」

第2回 2005(平成17)年11月1日(火)

発表者：岡田 健(国際文化財保存修復協力センター)

「文化財保護のマネージメント—美術史研究者としての経験」

第3回 2005(平成17)年12月20日(火)

発表者：川野邊 渉(修復技術部)

「キトラ古墳壁画の保存修復」

第4回 2006(平成18)年1月10日(火)

発表者：塩谷 純(美術部)

「黒田清輝って、どんな人?—その自筆文献から」

第5回 2006(平成18)年2月7日(火)

発表者：皿井 舞(協力調整官 情報調整室)

「文化財アーカイブの構築について」

第6回 2006(平成18)年3月7日(火)

発表者：宮田 繁幸(芸能部)

「民俗芸能とイベント公開」

## 美術部研究会 ( 美 )

美術部ではほぼ月に1度のペースで美術史研究者による研究会を開催、それぞれの研究やプロジェクトの成果を発表し、さらに議論によってその充実を図っている。平成17年度は下記のような研究会が行われた。

4月27日 中野照男(美術部)「最近の西域壁画の調査から 顔料分析と蛍光撮影を中心に」

5月25日 塩谷 純(美術部)「在外研究報告 菊池容斎《観音経絵巻》と狩野勝川院雅信《龍田図屏風》について」

6月29日 田中 淳(美術部)「後期印象派・考 人見東明のネットワークと受容されたイメージ」

7月27日 後小路雅弘(九州大学)「帝国のパブリックアート 青山熊治「九州大学工学部壁画」

8月10日 皿井 舞(協力調整官 情報調整室)「彫刻史における資料学の構築に向けて」

9月7日 小林未央子(美術部)「物質への関心 1910年代半ばから1920年代にかけての日本油彩画における」

9月21日 鈴木廣之(美術部)「ウー・ホン『ダブル・スクリーン』日本語版あとがきの意義」

9月28日 皿井 舞「仏像の荘厳 白豪相 を中心に」

10月28日 ミニ・シンポジウム「東アジア近代絵画における東洋と西洋」

山梨絵美子(協力調整官 情報調整室)「受容の往還 1910~20年代、日本絵画界における東洋的傾向について」

金 英那(ソウル国立大学校)「韓国美術における近代 羨望と克服の対象としての西洋」

顔 娟英(中央研究院歴史語言研究所・国立台湾大学芸術研究所)「モダニティと伝統 嘉義出身の三人の美術家の物語」

討論 司会:鈴木廣之

11月30日 鈴木廣之「フェノロサ書評 ルイ・ゴンス『日本美術』一八八三」

12月24日 蔵屋美香(東京国立近代美術館)「裸体の居場所 1920~40年代の裸体表現」

1月18日 綿田 稔(美術部)「雪舟筆「破墨山水図」はどう読めるか」

相澤正彦(成城大学)「雪舟筆『破墨山水図』と宗淵」

2月15日 「インドと日本の近代美術に関する研究会」

佐藤志乃(横山大観記念館)「ベンガル派による日本絵画の受容について 大観・春草との交流とウォッシュ・テクニクの試み」

トポティ・グーハ タクルタ(カルカッタ社会科学センター)「美術ナショナリズムの対話 20世紀初頭ベンガルの近代美術における日本との結びつき」

3月29日 勝木言一郎(美術部)「安西榆林窟における金剛童子の図像について」

## 保存科学部研究会(保)

(1) 2005(平成17)年6月28日(火)

文化財保護行政担当者のためのIPM入門 臭化メチル全廃後の生物被害対処

会場:東京文化財研究所セミナー室

参加者:89名

文化財保護へのIPM導入の経緯と背景

鈴木 規夫(所長)

文化庁としての取り組みと今後の方針 公開施設・修理・収蔵庫

奥 健夫(文化庁)

今後の生物被害対処法 - IPMの基本と対処法の実際

木川 りか(保存科学部)

IPM推進のための施設のあり方とカビへの対処法

佐野 千絵(保存科学部)

(2) 2005(平成17)年9月6日(火)

文化財保護行政担当者のためのIPM入門 臭化メチル全廃後の生物被害対処

会場:京都国立博物館

参加者:99名

文化財保護へのIPM導入の経緯と背景

森田 稔(京都国立博物館)

文化庁としての取り組みと今後の方針 公開施設・修理・収蔵庫

齊藤 孝正(文化庁)

今後の生物被害対処法 IPMの基本と対処法の実際

木川 りか(保存科学部)

IPM推進のための施設のあり方とカビへの対処法

佐野 千絵(保存科学部)

(3) 2005(平成17)年11月2日(水)

文化財保護行政担当者のためのIPM入門 臭化メチル全廃後の生物被害対処

会場:九州国立博物館

参加者:80名

文化財保護へのIPM導入の経緯と背景

鈴木 規夫(所長)

文化庁としての取り組みと今後の方針 公開施設・修理・収蔵庫

齊藤 孝正(文化庁)

今後の生物被害対処法 IPMの基本と対処法の実際

木川 りか・佐野 千絵(保存科学部)

九州国立博物館における IPM 本田 光子(九州国立博物館)  
 低酸素処置法と炭酸ガス処置法についての取り組み 今津 節生・鳥越 俊行(九州国立博物館)

(4) 2005(平成17)年11月17日(木)

IPM コロキウム 2005

会場:東京文化財研究所セミナー室

参加者:80名

国立歴史民俗博物館における IPM の活動 安齋 信人(国立歴史民俗博物館)

国立民族学博物館における IPM と防虫・殺虫処理法の使い分け 園田 直子・日高 真吾(国立民族学博物館)

建築段階から開館までの IPM の取り組みについて 本田 光子(九州国立博物館)

安土城考古博物館における IPM とデータの活用法について 高木 叙子(安土城考古博物館)

土浦市博物館の現在の取り組み 有害生物調査・防塵防黴・二酸化炭素燻蒸の3工法による実践 中澤 達也(土浦市立博物館)

Is Integrated Pest Management Difficult? (IPM はむずかしいでしょうか?)

トム・ストラング(カナダ保存研究所)/木川りか(抄訳・解説)

(5) 2005(平成17)年11月28日(月)

「建築材中の水分移動とその解析に関する研究」

会場:京都大学桂キャンパス

参加者:21名

古墳壁画の劣化に対する水の影響 石崎 武志(保存科学部)

建築材料の熱水分特性 ルドルフ・プラーゲ(ドレスデン工科大学)

異なった強度のコンクリートの熱水分特性 液相、気相の水分拡散係数の分離 小椋 大輔(京都大学)

アムステルダム国立博物館(Rijksmuseum Amsterdam)の改修

毛管作用のある断熱材を用いた壁面の熱水分特性の改善 ジョン・グルネワルド(ドレスデン工科大学)

壁面緑化の蒸発冷却効果の予測に関する研究 藤堂 香織(京都大学大学院)

「北海道開拓の村」における歴史的建造物の凍結・融解による壁面劣化とメカニズム 高見 雅三(北海道立地質研究所)

(6) 2005(平成17)年12月13日(火) 文化財の保存(収蔵展示)環境の研究

「展示ケース、展示施設の換気回数と湿度の安定性」

会場:東京文化財研究所セミナー室

参加者:65名

展示ケース、展示施設の換気回数と湿度の安定性 犬塚 将英(保存科学部)

熊本城「細川家舟屋形」の展示ケース内の温湿度・換気量の実測と数値シミュレーションによる検証 白石 靖幸(北九州市立大学)

九州国立博物館の展示ケースの換気回数、温湿度安定性、VOC について 鳥越 俊行(九州国立博物館)

建築基準法による化学物質発散に対する衛生処置 伊藤 一秀(東京工芸大学)

## 各国の文化財保護制度に関する研究会（セ）

国際文化財保存修復協力センターでは、わが国の文化財保護制度拡充のための政策的研究に資するため、またわが国が文化財保護を通して行う国際協力の効果的な遂行に資するため、世界各国の文化財保護制度に関する調査研究を進めている。本研究会は定期のものではないが、研究所の事業その他の目的で来日された各国の専門家、また国内の専門家をお願いして、文化財保護制度についての情報交換を行うことを目的に開催している。

### 第12回各国の文化財保護制度に関する研究会

イタリアの景観保護については1985年ガラッソ法が先駆的な法律として海外に知られ、その蓄積された景観保護の仕組みを背景に、イタリアではアッシジやオルチア渓谷、サクリ・モンティなど文化的景観分野での世界遺産登録が進んでいる。一方、文化遺産の保存に関する世界的な動向は、より多角的な視点からの保存管理体制の確立を目指しており、世界遺産条約でもこれを最重点項目として各国の貢献を求めている。広域の変化する景観を保護対象とする文化的景観の保存管理がイタリアでどのように進んでいるか、日伊の専門家を招待して研究会を開催した。

日 時：2005（平成17）年5月25日（水）10:15～17:00

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講 演：

ロベルト・マヌエル・グイド（イタリア文化財・文化活動省）

1. 「イタリアの世界遺産マネージメントプラン策定プロジェクト 構造と内容」
2. 「考古学的地区への適用 チェルヴェテリとタルクィニアの例」

パオラ・ファリーニ（ローマ大学）

「都市マスタープランからマネージメントプランへ 文化的景観への適用・アッシジとオルチア渓谷の経験」

本中眞（文化庁）

「日本の文化的景観の保存管理 「紀伊山地の霊場と参詣道」を例に」

### 第13回各国の文化財保護制度に関する研究会

文化的景観が文化遺産保護の分野で果たす役割について、世界各国での期待が高まっている。フィリピン・コルディリエーラの棚田群が世界で最初の農業景観として世界遺産リストに登録されたのは1995（平成17）年であるが、しかしその後すぐに危機にさらされている世界遺産リストにも登録されることとなってしまった。文化的景観の導入について考える際の重要なメルクマールともなっているこの遺産が、かかえる問題点はどこにあるのか。ユネスコ・バンコク事務所からまた地元から専門家を招いて研究会を開催した。

テーマ：アジアの文化的景観を考える 世界遺産フィリピン・コルディリエーラの棚田群の事例を通して

日 時：2005（平成17）年8月29日（月）13:00～17:30

会 場：東京文化財研究所セミナー室

講 演：

リチャード・エンゲルハルト（ユネスコ・バンコク事務所）

「アジアの文化的景観の現在」

マリベル・ビモーヤ（フィリピン・イフガオ州ラガウェ市）

「フィリピン・コルディリエーラの棚田群の保存、現在の問題」